

8月17日（月）ヘブル人への手紙1章13, 14節

「御使いはみな、奉仕する霊であって、救いを受け継ぐことになる人々に仕えるために遣わされているではありませんか。」（14節）

13節は、詩篇110篇1節の引用です。3節にすでに「御子は、〜いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」と言われていますが、ここでもう一度そのことを繰り返し語ります。13節の「いったいどの御使いに向かって、神はこう言われたのでしょうか。」との問いは、100%「いいえ。一度も言われたことはありません」との答えを期待するものです。イエスだけがいと高き所に上げられ、力と権威をもって大いなる方の右の座に着かれました。それは、御子イエス・キリストが、罪のきよめを十字架で成し遂げられたからです。どの御使いも罪のきよめを成し遂げることができませんし、被造物にすぎない御使いが、大いなる方の右の座に着かれることは絶対にありえないのです。

さらに14節で「御使いはみな、奉仕する霊であって」とありますように、御使いの主要な役割は奉仕をすること、仕えることです。さらには、「救いを受け継ぐことになる人々」とはクリスチャンを指しています。私たち信仰者一人ひとは、救いの完成を待ち望んでいる者たちで、イエス・キリストの現れの時に確かに救いの完成が成し遂げられますが、その約束された救いをそのまま受け継ぐ者とされています。御使いは、その私たちにも仕えるために御父のみこころにより遣わされるのです。イエス様も、しもべの姿をとられ（ピリピ人への手紙2章7節）イエス様ご自身も「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来た」（マタイの福音書20章28節）と言われましたが、地上にあってはイエス様も確かに仕える者となりました。しかし、今やイエス様は、いと高き所で、大いなる方の右の座に着いておられる方として、すべての被造物によりあがめられ、ほめたたえられ、仕えられるべきお方となりました。ですから、あがめられるべきお方はイエス様であって、ユダヤ人が御使い崇拝をしているようなことを決してすべきではないことをイエス様の御使いに対する優位性を示しながら、明瞭に語っています。

私たちも、すべての被造物にまさって高くあげられたイエス様を心からあがめ、たたえたいと思わされます。

8月18日（火）ヘブル人への手紙2章1節

「こういうわけで、私たちは聞いたことを、ますますしっかりと心に留め、押し流されないようにしなければなりません。」（1節）

「押し流されないようにしなければなりません。」との警告が与えられていますが、「押し流される」というのは、舟が漂流する様子を表すもので、そこから真理からはずれ、迷い出てしまうことを意味するようになりました。そしてこのような警告が与えられているということは、

私たちはいくらでも押し流されてしまう可能性があるということです。たとえばユダヤ教から改宗したクリスチャンの中にも、以前のユダヤ教の教えに逆戻りしたり、これほど御使いに対するイエス様の優越性が旧約聖書の中に記されているにもかかわらず、再び御使いを礼拝するようになったりすることもあったようです。そして私たちが押し流されないためには聞き方が大切です。私たちは聞く時に、注意深くし「聞いたことを、しっかりと心に留める」ような聞き方をしなければなりません。私たちは、聖書の真理に対してどのような聞き方をしているでしょうか。それをもう一度考えてみましょう。

さらに、もう一つ私たちが覚えておかなければならないことは、私たちが聞いたという事実です。つまり私たちが語られた真理を聞いたということは、それをどう受け止めるのか、その責任が私たちにゆだねられているのであり、聞いて従うべき責任が私たちにはあるということです。そういう意味でも、私たちは、神様の真理を聞くということを決して簡単なことと考えないようにしなければなりません。みことばを信仰をもって聞けることは確かに大きな恵みなのですが、それと同時に、責任をも伴う大切なことなのです。しかし、そのことは自分の力ではできませんから、私たちがみことばを聞く時には、決して聞き放しにしたり、聞き流したりしないで、聖霊の助けをいただきながら、それにふさわしく応答し、従う信仰と力が与えられるように祈りましょう。

8月19日(水) ヘブル人への手紙2章2～3節前半

「こんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、私たちはどうして処罰を逃れることができるでしょう。」(3節)

2節に「御使いたちを通して語られたみことば」とありますが、これは律法を指しています。このことは使徒の働き7章38、53節のステパノの説教やガラテヤ人への手紙3章19節からも明らかです。「御使いたちを通して語られたみことばに効力があり、」というのは、律法がその効力を発揮し、逆らったり、従わない者に対してさばかれたり、罰せられたりするということです。

それを受けて3節ですが、「こんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、私たちはどうして処罰を逃れることができるでしょう。」とあります。答えは、もちろん「逃れることは絶対にできません」です。そして、なぜこのようなことが言われているかと申しますと、イスラエルの民が与えられた律法に対して違反を犯したり、不従順の罪を犯して神から罰せられたからです。それと同じように、私たちは「こんなにすばらしい救い」とパウロが言っている救いを得た者ですが、その救いを私たちはないがしろにする可能性が大にあるということです。そうなった場合には、イスラエルの民が律法に逆らい、律法に不従順であれば、当然の処罰を受けたように、救いをないがしろにする者も、処罰を逃れることはできません。救いをないがしろにしない生き方をするために私たちがおぼえるべきことは、この手紙の著者が「こんなにすばら

しい救い」と言っていますように、イエス・キリストにより与えられた救いが、どれほど素晴らしいものであり、それがどれほど恵みに富んだものかを今日今一度おぼえることです。それと同時に、この救いをないがしろにせず、この救いを最後まで全うして生きることができるように、今日も主の助けを祈り求めましょう。

8月20日（木）ヘブル人への手紙2章3節後半～4節

「この救いは、初めに主によって語られ、それを聞いた人たちが確かなものとして私たちに示したものです。」（3節）

「こんなに素晴らしい救い」が3節の後半では、「この救い」と言い換えられて説明されています。

まず救いが「主によって語られ」たということです。この救いをなしてくださった主イエス・キリスト自らが直接救いについて語られたのですから、こんな確かなことはありません。さらに、それを聞いた人たち、つまり使徒たちが、それを「確かなものとして私たちに示し」しました。主が救いについて語られたことを聞いた使徒たちはイエス様の救いのみわざの目撃者です。それは使徒たちの宣教の働きの中に明らかにされていて、特に使徒の説教には、イエス様の救い（十字架の贖いと復活）が明瞭に現されています。実際に、ヘブル人への手紙を受け取った人たちはキリストから直接救いについて聞いたわけではありませんし、キリストによる救いを目撃したわけではありませんが、直接救いについて聞き、イエスを通しての救いを目撃した使徒たちが、それを確かなものとして示すなら、それを信じることができます。

「そのうえ神も、しるしと不思議と様々な力あるわざにより、また、みこころにしたがって聖霊が分け与えてくださる賜物によって、救いを証ししてくださいました。」とあります。不思議と様々な力あるわざが、イエスのみわざとしてなされたことが福音書の中に記されていますが、ヨハネの福音書においては「しるし」という独特な表現が用いられています。神がこれらを通して救いを証しされたのですが、それは、とりもなおさずキリストが旧約聖書において預言されたメシア（救い主）であり、確かにこの方を通して神が計画された救いが成就したことを証ししているということです。また、「みこころにしたがって聖霊が分け与えてくださる賜物によって」とありますが、御霊の賜物は使徒の働きやコリント人への手紙第一においてパウロによって述べられ、初代教会の大きな特徴でもありました。神は救いを御霊のみわざや賜物を通して確かなものとして、また、救いは世にあつていかに力強く、幸いなものであるかを証しながら、時を越えて多くの人々により力強く宣教されることにより、私たちも救いを受けているのです。

ですから、私たちは、常に救いの確信に日々立って歩み続け、みことばを通して聖霊ご自身が私たちの受けた救いがどれほど素晴らしいものであるかを証ししてくださることにより、その確信がさらに強められていくように祈りましょう。

8月21日（金）ヘブル人への手紙2章5，6節

「人とは何ものなのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたがこれを顧みてくださるとは。」（6節）

5節の「来たるべき世」の解釈については議論がありますが、妥当なところとしては、イエス・キリストによって始まった新しい秩序、つまりキリストを通してもたらされた救いを通して神の国が訪れたが、「来たるべき世」においては、救いの完成が待ち望まれています、そのような意味での来たるべき世ということです。まさに、救いの完成の時には、神の完全な支配が実現しますが、そのようにして御国を支配するのは、御子イエス・キリストであって、すべてのものは御使いではなく、イエス様に従うという意味でも、イエス様は御使いにはるかにまさる優越性があると言えます。

6節は詩篇8篇4～6節の引用です。この詩篇は、もともと神の創造と栄光を歌っていました。そして、創造時点で人間は理想的な状態にありました。創造の際に、神は人に対して祝福をもって「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」（創世記1章28節）と言われ、人間は神から地上のすべてのものの管理を委任されていましたが、墮落して以降は、神のみこころに基づいた支配を人はできなくなってしまいました。

しかし、人となられた神であるイエス・キリストを通して、本来あるべき人の姿が回復されました。特に6節に「人の子」とありますが、イエス様もご自分をしばしば人の子と呼ばれましたが、イエス様があるべき人の子の姿を現してくださいました。「人とは何ものなのでしょう。」

「人の子とは何ものなのでしょう」と、罪のゆえに完全に神を見失った人々の問いかけに、神自らが答えを与えてくださり、本来あるべき人の姿はイエスによって信じるすべての者に与えられるのです。

8月22日（土）ヘブル人への手紙2章7，8節前半

「あなたは、人を御使いより わずかの間低いものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせ」（7節）

7節「あなたは、人を御使いより わずかの間低いものとし」は、詩篇8篇5節の「あなたは人を御使いより わずかに欠けがあるものとし」の引用です。つまり詩篇8篇5節では、もともと人が造られた時の創造の秩序において、人は御使いよりもいくらか低い者として創造されたことを意味していますが、それは人間の尊厳のしるしでもありました。それは、御使いを除くすべての被造物に対する人の優越性を表すものだからです。そして、これがヘブル人への手紙において、イエス様に適用される中で、人、すなわち人となられたイエス様が、神のみこころにより御使いよりもわずかの間低いものとされたということです。そういう意味では、イエス

様は完全に人となられ、御使いよりもわずかの間低くされることをも受け入れてくださり、完全な人となられたというたことです。

「これに栄光と誉れの冠をかぶらせ」とは、救いを成し遂げられたイエス様が、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれたことを（1章3節）を意味しています。御使いよりもわずかの間低くされた方を、神が高くあげてくださったことは、高いものを低くし、低いものを高くされる神のみこころにかなったことです。そして、そのようにしてキリストが高くあげられたということは、「万物を彼の足の下に置かれ」ということであり、イエス様は、天地万物を創造されただけではなく、創造されたすべてのものを治めておられるということです。

本来であれば、御使いよりもはるかに高い存在であった御子イエス様が、まことの人となられて、わずかの間御使いよりも低くされた立場を受け入れてくださったところにイエス様の謙遜があり、人に対する愛が現れました。そして、人類の罪からの救いがこのイエス様を通して成し遂げられたことをおぼえつつ、私たちはイエス様に心からの感謝をささげたいと思わされます。

8月23日（日）ヘブル人への手紙2章8節後半

「神は、万物を人の下に置かれたとき、彼に従わないものを何も残されませんでした。それなのに、今なお私たちは、すべてのものが人の下に置かれているのを見てはいません。」

（8節後半）

「彼に従わないものを何も残されませんでした。」とのことばは、「万物を彼の足の下に置かれました」（8節）ということ成就されたイエス様にのみ適用されます。実際に1章3節では「その力あるみことばによって万物を保っておられます。」とあるとおりです。しかし、8節で「万物を彼の足の下に置かれました」「万物を人の下に置かれたとき、彼に従わないものを何も残されませんでした」という場合には、決して従わないものをすべて滅ぼしたわけではありませので、「それなのに、今なお私たちは、すべてのものが人の下に置かれているのを見てはいません。」という状態なのです。しかし、御国の完成の時には、私たちはすべての罪や悪や神に逆らうすべての力が滅ぼされ、すべてものがイエス様の完全な支配のもとに置かれるのを私たちは見ることになります。それと同時に、服従をイエス・キリストではなく、人に当てはめる解釈もあります。すなわち創造の秩序の回復として、人がすべてのものを治めるようになるとの解釈です。そして、この解釈も十分可能ですし、実際には御国の完成の時に、主によって贖われた者たちがキリストにあつてともに治めるようになると考えれば、それほど解釈に差はないようにも思えます。

イエス様は、まず人となられたご自身が「万物をその足の下に従わせられる」ことを成し遂げられ、今もすべてのものを保っておられます。それに続いて、イエス様の私たちに対する罪の贖いを通して、私たちが創造の初めに与えられていたにもかかわらず、失ってしまっていた

万物の支配については、新しい天と新しい地が回復される時に、イエス様にあって実現します。
そのことを信じることにより、罪の世にあって、すべてのものがイエス様の下に置かれていない罪の現実の中にあっても、私たちは希望をもって歩んでいくことができるのです。